

# 秦字考

高久由美

## On the Variations of Archaic Form of the Character "秦 Qin"

Yumi Takaku

はじめに

先秦時代の古文字研究においては、かねて論じたように、古文字資料そのものと、後漢時代に編纂せられた許慎『説文解字』（以下『説文』）との関わりをいかに見定めるか、ということが、極めて大きな課題の一つである。近数十年來の中國において古文字資料が陸續と地下から出現するという状況下で、この問題に對する解答を得るべく、様々な局面からのアプローチを試みるべきであるが、今ここに、この問題に對してまた新たな観点から照明をあて得るかと考えられる新資料の存在に氣付いたので、以下にその一例證として論じたい。

ここに取り上げるのは「秦」並びに「𣎵」、「𣎵」の諸字である。

### 一 甘肅禮縣秦公諸器における「秦」字の問題

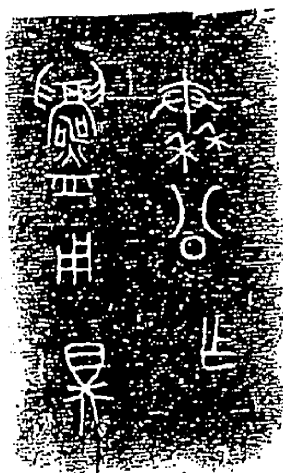
一九九二年から九三年にかけて、甘肅省禮縣大堡子山秦公墓地より「秦公」の銘を帯びるいくつかの青銅器が盗掘されたことがいくつかの學術誌に報じられ研究者の關心を集めている。そのうち、最も早く公表されたのは、秦公壺一對であり、一九九四年、ニューヨークの骨董商のオークションカタログにその器影と銘文拓本が掲載され、該壺及び関連諸器の斷代を

めぐって展開する議論の嚆矢となった<sup>1)</sup>。その後、秦公壺と同出と思われる鼎四件と段二件が上海博物館に購入され<sup>2)</sup>、また新たに戈一件が報告され<sup>3)</sup>、一連の秦公諸器が徐々に公表されつつあり、これら銅器群をめぐっての諸家の意見も陸續と發表されている。

正式な發掘を経た出土物ではないため、出土状況を嚴密に知ることは今となつては不可能である。しかし、出土地とされる甘肅省禮縣大堡子山付近では、一九九四年に甘肅省考古研究所による緊急發掘が行われ、中字形の大墓が二座、瓦刀形の車馬坑が一座、中型小型の墓葬が九座、整理され、中字形大墓から出土したとされる「秦公」の銘を帯びた鼎と段とが各一件、新たに報告された<sup>4)</sup>。

これら銅器群の斷代と墓主の比定については、①形制・紋様の類似する同時代の青銅器（標準器）との比較、②銘文の文字、③銘文にある「秦公」と文獻との對應關係、④出土地・甘肅省禮縣、といった點からその製作年代が推定されており、以下に表記した諸家も、多くはこれらの點をリンクさせながら各銅器の年代について論じている。

JJ Tally <sup>5)</sup>	斷代對象	斷代
壺		西周晚期



上海秦公鼎二

銘文は各器とも僅か五、六字にすぎないが、甕季子白盤、不盤、武公秦公鐘、天水秦公段及び盩厔鐘などの秦系有銘青銅器との比較が、墓主の比定・青銅器の断代について展開する議論の中で、有力な根拠とされた。そして、上海博物館が新獲した秦公鼎四器、秦公段二器が一九九六年に公表されるに及んで、字形をめぐる議論は、さらなる展開を見せる。四鼎二段のうち、「秦公」という文脈で、四器に「森」、二器に「森」という異體字が現れたからである。

李學勤 <sup>3</sup>	壺	莊公
韓偉 <sup>3</sup>	墓葬	秦仲・莊公の陵墓
陳昭容 <sup>3</sup>	壺	文公
白光琦 <sup>3</sup>	壺	襄公以降
陳佩芬 <sup>3</sup>	鼎	春秋早期
李朝遠 <sup>3</sup>	鼎・段	襄公、文公
盧運成 <sup>3</sup>	壺	憲公或いは文公
陳昭容 <sup>3</sup>	鼎	襄公・文公
陳平 <sup>3</sup>	墓葬・鼎・段	文公・憲公
王輝 <sup>3</sup>	墓葬・鼎・段	襄公・文公
吳鎮烽 <sup>3</sup>	戈	出子
戴春陽 <sup>3</sup>	戈	春秋早期
	墓葬・鼎・段	襄公



上海秦公鼎三

禮縣秦公諸器は、文字の構成要素として、「白」があるかどうかによって森組と森組に分けることができる。

森組 秦公鼎二 秦公鼎四 秦公段一 秦

公段一

森組 秦公鼎一 秦公鼎二 (及び秦公壺一 秦公壺二)

秦子戈 秦子矛 甘肅秦公鼎 甘肅秦公段

森組・森組では、銘文の鐫上がりは巧拙入り交じっており、どちらが技術的に優れているとは言えない。しかし、秦公鼎四器の銘文の語句に關しては、

森組「秦公乍實用鼎」

森組「秦公乍鐫用鼎」

とあり、動詞部分に森組は「乍」、森組「乍鐫」と、各組により使い分けがなされている。

『説文』説解では、「秦」は次のように説明されている。

秦 伯益之後所封國。地宜禾。从禾春省。一曰：秦禾名。籀文

秦从秝。〔匠鄰切〕（七篇上）

「白」をともなう點では禮縣森組銅器群「森」は正に『説文』説解に云う「春省に从ふ」の祖形であるといつてよい。一方、森組銅器群「森」は『説文』籀文に繋がる字形といえる。

この現象に對する説明として、森組の銅器群を製作年代の早いグループ

とする説<sup>⑤</sup>、逆に、森組の銅器群を製作年代の早いグループとする説<sup>⑥</sup>の両論があり、これを作器者秦公Ⅱ墓主問題と絡めた議論がなされている<sup>⑦</sup>。また、これらとは異なり、兩銅器群の字形の違いを、時代の早晚ではなく、森組が秦人が本来用いていた字形、森組を規範化された籀文とする見方もある<sup>⑧</sup>。

## 二 甲骨文における「秦」の用例

「秦」は甲骨文においては𣎵<sup>⑨</sup>（Ⅰ期）𣎵<sup>⑩</sup>（Ⅳ期）の如く作り、兩手に杵を持ち穀物を打つ象形と解されてきた<sup>⑪</sup>。『説文』籀文𣎵<sup>⑫</sup>との字形的な連続性から該字を「秦」と釋したのである。卜辭では第一期、第三期、第四期に見える。

- ① 戊戌卜。方貞。呼取：弱森（宗）。（合二九九、後下三七・八）
- ② 其形日森侑宗于祖丁。茲用。（合二七三二五、寧一・一九二）
- ③ 弱森宗于妣庚召。（合三〇三二九、甲七九四）



④ 弱森于... 甲寅：祖乙森宗。（合三〇三四〇、散四四・八）

⑤ 森宗（合三〇三四四反、普七四四七）

⑥ 于岳森即（合三〇四一六、後下三九・二）

⑦ 弱森宗于妣庚（合三二七四二、甲五七二）



⑧ 弱森宗（合三四〇六四、散三七・九）



⑨ 弱森宗（屯南三二〇）

いずれの版も「森宗...」という熟語となり、...部には「祖丁」「妣庚」などの賓語をとまなうことや、否定詞「弱」が先行する用例が多いことから、卜辭中では動詞として用いられていると判断してよい<sup>⑬</sup>。よって、③や⑦にある卜辭「弱森宗于妣庚」は「宗を妣庚に森するなからんか？」と解釋できよう。

ところで、𣎵<sup>⑭</sup>の関連字として、甲骨文における「春」を参照してみることにする。「春」は甲骨文では𣎵<sup>⑮</sup>の如く作り、兩手に杵を持ち、臼に臨んで粟を搗く象形と解されている。もし𣎵<sup>⑯</sup>が、字解の通り粟の杵をはずすことと関連する動作であるということは、兩手の道具は本来は杵というよりも、穀物から初穀をこそげ落とすためのたたき棒のような道具であったはずである。そして、脱穀という行為は、穀物を粒食するためのプロセスである。それに對して、杵と臼で穀物を搗く𣎵<sup>⑰</sup>は、製粉に關連する動作であった筈で、食文化的には、「森」と「春」はもともと全く性質を異にする行為であったわけである。

河南省の新石器時代の裴李崗遺跡では、穀物を製粉する爲の道具と思われる石磨盤と石磨棒が発見されているが<sup>⑱</sup>、それらは仰韶文化期には見られず、食生活上の大きな變化があつたのであろうと推測される。𣎵<sup>⑲</sup>と𣎵<sup>⑳</sup>という二種類の文字と、粉食から粒食という食生活の變化との間には、或いは何らかの繋がりがあるのかもしれない。また、甲骨文ではないが、「森」は人名の固有名詞として殷金文にも現れる。



史 森 史森器(『集成』四六八)

吳鎮烽は、「史森」は秦を名とした周王朝の史官で、西周中期前段の人とした。銘文の體例からすると西周金文のようであり、固有名詞とする吳氏の解釋で間違いないが、しかし、器形からすると、該器はおそらく殷代のものと判断するのが妥當である。

### 三 西周金文から列國金文における「秦」の用例

① 賞辛吏秦金(辛吏彝)『集成』一〇五八二

西周前期の辛吏彝では、字形は三禾に从い、𠂔と作る。銘文には

六月初吉癸卯、

伊口徙于辛吏、

伊口賞辛吏秦

金、用作父口尊彝。山。

とあり、波線部は「伊口」人名、辛吏に秦金を賞す」と讀める。吳闔生は、賜物の「秦金」を「秦の地に出る所の金」であるとす。吳氏が果たして金をゴールドと考えたか銅地金と考えたかは定かではないが、ここでは當然後者の意味であり、金文における賞賜物として

王易金百𠂔(禽殷)『集成』四〇三二

易金一𠂔(内史鼎)『集成』二六九六

といった文例で頻見する。しかし、「金」の前に何らかの修飾語が付された例としては、時代の降った戰國期の

陳金造戈(陳金造戈)『集成』一一〇三五

繁陽之金(繁陽之金劍)『集成』一一五八二

の僅か二例を見るのみである。しかし、同じく賞賜銘文に賞與物として頻出する「貝」には、前に修飾語をともなつた例として

乙未、王賞宗庚豊貝二朋(豊乍父丁鼎)『集成』二六二五

賞獻侯豊貝(獻侯乍丁侯鼎)『集成』二六二六

天君賞爭征人斤貝(征人乍父丁鼎)『集成』二六七四

珣賞又正嬰豊貝(嬰方鼎)『集成』二七〇二

白懋父承王令易自逕征自五𠂔貝(小臣謹設)『集成』四二三八

丙申王易旅亞𠂔𠂔貝(旅亞口乍父癸角)『集成』九一〇二

王易小臣餘𠂔貝(小臣餘尊)『集成』五九九〇

などがある。波線部に示したのは、貝に「豊」「斤」「嬰」「五𠂔」「𠂔」などの地名が修飾語として付いている例で、その産地を示していると解されることが多い。それから類推すれば、「秦金」を秦の地方の銅地金と解する證となり得よう。であるとすれば、三禾に从う𠂔の文字は、地名・秦として用いられていることになる。



會 森 會 豐方鼎(『集成』二七三九)

豐方鼎は一九二四年、陝西省鳳翔縣の西二十キロに位置する靈山の古墓からの盜掘品で、當時はこの古墓が秦文公墓かもしれないなどと報じられた。西周滅亡後、大戎によつてもちさられた青銅器が、秦文公によつて再び獲得され、文公没後埋葬されたというのである。該器は西周前期に製作されており、銘文の前後は

戊辰、會秦會、公賞豊貝百朋。

とある。この部分は特異な語法であるが、「會」を「飲」と解釋し、「秦」は「臻」の假借であるとすれば、銘文は「飲臻飲」と解され、春秋時代におこなわれた儀禮である「飲至」に比定される。この説が最も有力である。文獻の方では、『左傳』隱公五年に

三年而治、入而振旅、歸而飲至。

とあり、意味的にはまさにこれが銘文の「飲臻飲」と對應するものと考えられる。よつて、豐方鼎における「臻」の意味は、「臻」の假借として用いられているものと言える。「臻」が「臻」の假借として用いられるのは、金文中では豐方鼎が唯一の例といつてよからう。



③ 森戸 師西段『集成』四二八八、四二九一

師西段は、西周中期に製作されたと思われるが、その銘文には、

嗣乃且啻官邑人、虎臣、西門戸(夷)、森戸(夷)、秦戸(夷)、京戸(夷)、

卑戸(夷)。新易女(汝)赤市朱黃中綱、攸勅、敬夙夜勿瀆(懸)朕令。とあり、「森夷」の語が現れる。これは、王が師西に對して祖先から受け継ぐよう冊命されたもので、「森夷」は異民族からなる武裝組織と解されているようである<sup>11)</sup>。

注目すべきは、「森」に「臼」が付加されて、「森」を作る点であり、ここで初めて構成要素として「臼」を含む文字が出現したわけである。師西段は、阮元『積古齋鐘鼎彝器款識』(一八〇四年刊)において、第一器の器蓋一對が阮元の藏品として著録されてから、その後二世紀にわたって数多くの金文著録に収められてきたが、拓本によつて文字に相當な異同もあつたにもかかわらず、器と拓本の關係について系統的な検討が試みられたことはなかった。よつて、「森」も、拓本によつては中央の「臼」が本來の字形からかなり訛變しているのではないかということも指摘されていた<sup>12)</sup>。器の流傳と拓本の系統が整理された結果が右表である。



第一器器銘『集成』四二八九—二 中國歷史博物館現藏



第一器蓋銘『集成』四二八八—二 北京故宮博物院現藏



第二器器銘『集成』四二八八—二 北京故宮博物院現藏



第二器蓋銘『集成』四二八九—二 中國歷史博物館現藏



第三器器銘『集成』四二九〇 北京故宮博物院現藏



第四器器銘『集成』四二九二 北京故宮博物院現藏



第五器銘『小校』八・七一ウ 不明

七銘のうち、第五器銘は第四器銘に基づいて製作された偽銘と考えられる<sup>13)</sup>。よつて、ここでの考察の対象からはずし、六銘を比較してみると、このうちの第二器銘と第四器銘が手本とされ、その他の銘文が製作されたことが看取できる。「森」についても同様で、手本では「臼」が非常に明瞭であるのに對して、その他の銘文では、「臼」底部が切斷されてしまい、もはや原形をとどめていないことがわかる。本來の字形については第二器銘と第四器銘を採用すべきである。これによつて、師西段と禮縣秦公諸器における「森」字との字形的連續性を確認することができた。

では、「秦」に臼が付加されたのはなぜか、以下にその理由を探つてみたいと考える。まず、問題とすべきは、師西段において初めて用いられた「森戸(夷)」という語である。それまでは、「森」は、動詞や人名であつて、族名、地名として用いられたことはなかった。師西段で「森戸(夷)」と呼ばれている族集團が、はたして春秋時代の秦國に連續しているのかということは、慎重に検討すべき問題であらう。該器の斷代は西周中期とされるが、この頃から西方の異民族に對して「dān」<sup>14)</sup>という呼稱が用いられるようになったのであらうか。だとすれば、「森」の一部に「臼」というパーツを加えて新たに「森」という文字を作り出し、「森」や固有名詞とは區別して用いたのだとは考えられないであらうか。師西段の段階でこのような使い分けがなされたのではないであらうか。

西周後期になると、同一銘文中で、「秦夷」という文脈では「森」字が用いられ、「戌秦人」という文脈では「秦」字が用いられる旬段が登場する。



④ 森戸(夷)



戌秦人 旬段『集成』四三三一

句段は、一九五九年に陝西省藍田縣寺坡村より出土した。作者である句は詢に比定され、薛尚功『歷代鐘鼎彝器款識法帖』所録の師句段と同一作者と考えられている。銘文の内容が相當程度共通していることから、師句段との關連が指摘されており、西(師句段の作者)と句は同じ官職の地位にあったとされる<sup>5)</sup>。

銘文の文字に關して師句段と異なる點の一つが、二度にわたり異體字で「森尸」「戌秦人」の語が用いられている點で、銘文の前後はそれぞれ「今余令女留官嗣邑人、先虎臣、復庸西門尸(夷)、森尸(夷)、京尸(夷)」「走亞戌秦人降人服尸」とある。郭沫若の釋文には、「春夷」「秦人」とあり、春字と秦字は同一のものとして混同してはならないと注記している<sup>6)</sup>。

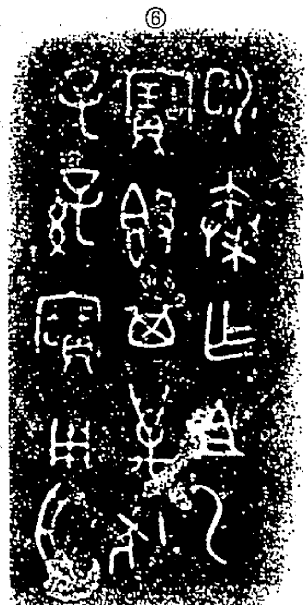
郭氏の説の如く、同一銘文中の異體字を、別の事象を指すものとして區別して考えることに對しては異論はないが、第一例「森夷」を「春夷」と釋すには無理がある。春は金文では、西周中期の「伯春盃」における固有名詞としての用例があり、文字の下部は秝ではなく臼でなくてはならない。



⑤ 伯春盃(『集成』九三九九)

よって、句段銘は字の如く「森夷」「秦人」と釋しておくべきであろう。

このことは、「森」が西周時代に勃興した秦「[sen]p」[sen]p」という族集團に對して作られた文字であろうという假説に矛盾してゐるようだが、師句段においては、「森」に對して族集團「[sen]p」の專字として「森」という文字が用いられたが、句段においてはそれが「森」にとつて替わられ、更に異なる概念を表すために「秦」という文字が用いられたということなのかもしれない。第二例の字形「秦」は、文字構成要素からすれば「説文」小篆「秦」と字形的連續性をもつものといえるが、この字形が金文において初めて出現した例は、次にあげる洹秦段においてである。



⑥ 洹秦段(『集成』三八六七)

洹秦段は西周中期の製作とされており、銘文には「洹秦乍且乙寶其萬年子孫寶用。□。」とあり、「洹秦」は人名であることがわかる。西周中期に至って初めて秝ではなく禾に从う秦があらわれたこと、そして「洹秦」「秦人」の如く、人名、地名とそれぞれ異なつた用法であること、杵や禾の字形が師句段とも句段第一例ともかなり異なつてゐることなどがわかる。

これまでの検討結果は次のように集約される。

森(甲骨文・殷金文)→森(西周前期)→森(西周中期)→森・秦(西周後期)

#### 四 東周時代の諸地域における「秦」字について

以下では、東周時代における「秦」字の字形と用例を、列國金文の中に現れていくこととする。「秦」字は、秦系青銅器と楚系青銅器に用例がある。

左表は、秦系青銅器における、秦字の一覽表である。



武公秦公鐘1



武公秦公鐘2



武公秦公鐘3



武公秦公鐘5



武公秦公鐘1a



武公秦公鐘1b



武公秦公鎛 2a



武公秦公鎛 2b



武公秦公鎛 3a



武公秦公鎛 3b



秦公殷 a



秦公殷 b



秦公大墓石磬



詛楚文

春秋以降の秦系青銅器においては、甲骨文以來の字形である森が用いられた。右表に用いられた文字は、全て、「森公」、「森王」などの文脈で、春秋時代以降は國名として専ら用いられたものと思われる。秦以外の地域の列國金文においても「秦」字の用例は國名で用いられているものが多い。字形も秦系青銅器同様「森」である。

①孟姜秦嬴（鄒子妝璽『集成』四六一六）



璽の銘文は

唯正月初吉丁亥、鄒子妝擇其吉金、用鑄其璽、用贖孟姜秦嬴、其子ニ孫ニ永保用之。

とある。鄒子妝は春秋時代の許國の人とされ、銘文によれば、該器は鄒子妝が孟姜と秦嬴のために製作したということである。作器對象とされる孟姜と秦嬴とは、姜姓の女性と秦國の女性と解されている<sup>(20)</sup>。

②逄征<sup>(21)</sup>遼齊入長城（鳳姜鐘『集成』一五七〇・一六一）

①と②は秦以外の地域の文字だが、字形は「森」である。しかし、戰國時代になると、秦以外の列國の字形に變化が生じる。戰國早期の敕秦戎鐘<sup>(22)</sup>にも「秦」字の用例があるが、字形は①②における「森」とは異なり

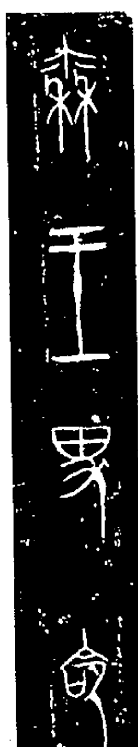
「森」と作る。

③森王卑命（鉦部）

競堀（以下左鼓部）

王之定

救森戎（『集成』三七）



該器は一九七三年に湖北省當陽縣李家湖遺址より單獨で出土した<sup>(23)</sup>。編鐘として套になっていたはずの前後の鐘との關係が不明であったため、鐘銘の句讀及び断代をめぐり、諸家の間で議論が展開した。また、秦器とするか楚器とするかという点でも意見が分かれた。銘文鉦部を「秦王、卑命す」と解して断代する者<sup>(24)</sup>、鉦部を前からの續きと考え、「秦王、卑命す」と句讀し、楚器とする者<sup>(25)</sup>と、諸家の見解は様々であったが、銘文の字形からも、この鐘には秦系青銅器との共通點は見出し難く、やはり、戰國前期の楚器と考えるのが最も妥當であろう。

ようになり、この特徴は、戦国後期の楚の幽王期とされる大府鎔にも次のようにある。

⑥ 秦客王子齊之歳、大府爲王口鎔。集脰。(大府鎔『文物』一九八〇年第八期)

齊 客 王 子 齊 之 歳

銘文前半の「秦客王子齊之歳」は、楚における大事紀年の表現で、他國からの使者の活動を記すことによつて曆としたものである。これによれば、秦國の使いである王子齊が楚を聘した歳、という意味である。「秦客云々」の語は楚簡でも

客陳新(包一・一四五)

客公孫駟問于蔑郢之歳(天・上)

とあり、文字は金文と同じく「森」と作る。

大府鎔では、秦國の意味で用いられるのに對し、同じく戦国後期・幽王期のいくつかの金文においては、人名でも「森」が用いられる。

⑦ 大右秦(東陵鼎蓋『集成』二二四一)

大 右 秦

⑧ 治市(師)專(傳)秦佐苛臚爲之楚王會志鼎一・蓋内『集成』二七九四

治 市 專 秦 佐 苛 臚 爲 之 楚 王 會 志 鼎 一 蓋 内

⑨ 治市(師)盤楚佐秦志爲之楚王會志鼎一・器腹外『集成』二七九四

治 市 盤 楚 佐 秦 志 爲 之 楚 王 會 志 鼎 一 器 腹 外

⑦ 東陵鼎蓋は、『錄遺』七〇・一、二に銘文拓本が著録される楚器で、周縁部の兩側に各々一行三字ずつ銘文があり、うち一行に「大右秦」とあり、ここでは國名の意味ではない。銘文の解釋については二説あり、そのうち一つは、「大右秦」とは該鼎がもとと用いられていた場所とする説で、用法的には、洛陽金村出土の同蓋銘文にある「左佰」に類するとする<sup>10)</sup>。もう一つは、「大右」が官職名で、「秦」は人名とする説で、用法的には朱家集出土楚器の一つである大右刃鑑銘「大右刃」と同じとする<sup>11)</sup>。

⑧ ⑨は、一九三三年に安徽省壽縣朱家集から出土した一群の楚器のうち、楚王會志の銘をもつ二鼎である。これら楚器には、銘文の一部に、物勒工名式に、治金師の名が鑄されている。第一鼎についていえば、蓋は專(傳)秦と助手の苛臚というペアが作者であり、器は盤楚と助手の秦志が作者であることが蓋内と器腹外にある銘文からわかる。よつて、「秦」は、治金師「專(傳)秦」、治金助手「秦志」という固有名詞においてその用例が檢出されたわけである。

作蓋者である專(傳)秦と助手の苛臚には、他にも同じコンビで製作した勺と匕があり、勺は三件、匕は二件で、いずれにも以下の如く、七字からなる銘文がある。

⑩ 治「師」專(傳)秦苛臚爲之(治師勺『集成』九九三一、九九三二)

治 師 專 秦 苛 臚 爲 之 治 師 勺

また、作器者である盤楚と助手の秦志にも、同じコンビで製作した匕が二件あり、七字からなる銘文がある。

⑪ 治「師」盤楚秦志爲之(治師匕『集成』九七五、九七六)



以上においては、「秦」は鑄造師の人名で、全て戦国後期の幽王期のものとされる。

また、「𣪠」は、楚系文字に限らず、河北易縣出土の戰國陶文でも用いられている。



四・一〇八

この他、分域研究の進んでいない戦國古璽においても、午と秝に从い森、𣎵に作るものが圧倒的に多く、「森」に作る字形は現れない。また、「森」と並行して、午と禾と邑に从い秝、秝に作る古璽も非常に多いということを指摘しておく。おそらく「秦邑」の意味で用いられている合文であり、「森」とは別字として扱うべき資料であるはずである。それらの殆どが姓名私印であるため、編年・分域研究は困難であるが、左に挙げる田字格印「𣎵發□璽」は、田字格、用字などから楚國古璽と考えられる。



『鶴々莊藏古璽印』

また、曾侯乙墓竹簡には、「二秦弓」（曾三、曾五）という文脈で「秦」が用いられており、「秦國」としての専用字であると解されている<sup>156</sup>。構成要素としては「邑」と「秦」から成り立っており、古璽の「邳」と同字

と考えてよいであろう。構成要素として「目」に从う點が「森」と共通していることが指摘できる。

戦國時代においては「霖」と「霖」の二字が並行して用いられており、そのうち、「霖」は璽印文字（及び曾侯乙墓竹簡）のみに現れる「秦邑」の専字であつたといえよう。秦が滅び漢代になると、「霖」字が突然用いられなくなつたことからそのことが推測できる。漢印では一轉して小篆に基づいた字形である「霖」のみが用いられるようになっていく。

これらの秦以外の地域において用いられていた文字が、後に「古文」という名で呼ばれることになる。その結果として、三體石經の『春秋』・文公二年には、



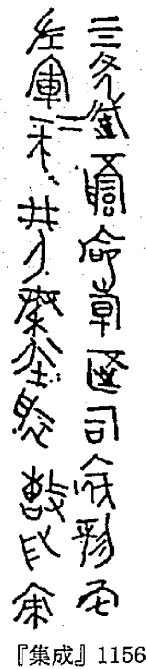
『魏三體石經集錄』  
拓本四十一

として、戦國時代の楚金文や古璽で用いられていた「森」が古文として収められることになったのである。また、後に『古文四聲韻』（平上十八真部）に、『古尚書』所載の古文として、**𣏟****𣏟** 兩字が採録されているが、古文といひながら、古文と籀文の二種類の字形を載せている。

五『説文』小篆

戦國時代における「秦」字は、「森」と「𣎵」のみではなかった。青銅  
 禮器以外の、兵器、陶文、竹簡といった日常的に用いられた文字資料にお  
 いては、「森」でも「𣎵」でもない、「秦」が用いられるようになってきた  
 のである。その祖形はいうまでもなく西周時代の湏秦毆や匄毆における  
 「秦」であつたわけだが、再度文字史上に現れるまでに相當な時間を経た  
 わけである。

小篆の原形となっている「禾」に从う「秦」は、西周時代の恒秦段や旬段以降、春秋時代の文字資料には殆ど見えず、戦国時代になると、三晉兵器銘文にあらわれる。



『集成』1156

中国歴史博物館に蔵される四年雍令矛は、戦国時代の韓の兵器とされ、銘文には、鑄造者が「左庫工師刑秦」と刻されており、「秦」は「禾」に从い「禾」に作る「秦」である。

統一秦になると、陶文や秦簡に見えるのは殆ど全てが「禾」に从う「秦」である。



『秦代陶文』

5.420



『秦代陶文』

5.313

これらが、後に、『説文』小篆として吸収されていったのである。「森」↓「秦」という字形変化は戦国時代において、秦でも、秦以外の地域でも進行していたことがわかる。

## 六 おわりに

今回の検討は、新たに発見された資料を利用して、甲骨文字から戦国時代を一段とし、時代、地域、用途などあらゆる角度から「秦」という文字に照明をあてた結果、該字の五種類にわたる異體字「森」「森」「森」「森」「森」を整理することができた。これらは、秦漢における文字の變

革、規範化を経て、そのうちの二種類が『説文』に小篆、籀文として吸収され、また「森」は、古文として三體石經に吸収された。しかし、『古文四聲韻』には、「森」、「森」いずれも古文として採録されており、古文、籀文の問題についての、この方面からのさらなる検討が、今後の課題として残った。

## 【注】

- (1) 拙稿「釋殷—古文字研究における考古資料利用の試み—」『中国古代の文字と文化』汲古書院、一九九九年。
- (2) A Pair of Large Bronze Vessels (Hu) "Archaic Chinese Bronzes, Jades and Works of Art" June 1 to 25, 1994 J.J. Lally & Co. 李學勤・艾蘭「最新出現的秦公壺」『中國文物報』一九九四年十月二〇日。
- (3) 李朝達「上海博物館新獲秦公器研究」『上海博物館集刊』第七期、一九九六年。
- (4) 吳鎮烽「秦兵新發現」『容庚先生百年誕辰紀念文集』廣東人民出版社、一九九八年。
- (5) 戴春陽「禮縣大堡子山秦公墓地及有關問題」『文物』二〇〇〇年第五期。
- (6) J.J. Lally (2) 前掲論文。
- (7) 李學勤 (2) 前掲論文。
- (8) 韓偉「論甘肅禮縣出土的金箔飾片」『文物』一九九五年第六期。
- (9) 陳昭容「談新出秦公壺的時代」『考古與文物』一九九五年第四期。
- (10) 白光琦「秦公壺應為東周初期器」『考古與文物』一九九五年第四期。
- (11) 陳佩芬「上海博物館中國古代青銅器」Philip Wilson Pub. limited, London, 秦公壺 (p. 79, No. 49) 一九九五年。
- (12) 李朝達 (3) 前掲論文。
- (13) 盧運成「秦國早期文物的新認識」『中國文字』(臺灣) 新第二十一期、一九九六年。

- (14) 陳昭容『談甘肅禮縣大堡子山秦公墓地及文物』、『大陸雜誌』(臺灣) 第九五卷第五期 一九九七年。
- (15) 陳平『淺談禮縣秦公墓地遺存與相關問題』、『考古與文物』一九九八年第五期。
- (16) 王輝『也談禮縣秦公墓地及其銅器』、『考古與文物』一九九八年第五期。及び王輝・程學華『秦文字集證』臺灣・藝文印書館、一九九九年。
- (17) 吳鎮烽(4)前掲論文。
- (18) 戴春陽(5)前掲論文。
- (19) 本稿の上半分が、春が省略されて残った部分であるという知識が、かくも時代を隔てた後漢の文字學者に繼承されていたことに對して、從來充分な検討はなされていまいように思える。許慎が果たして先行する古文字の字形を知っていたかどうかも定かではない。時代を隔てた文字知識の傳搬の一例として今後の検討課題としたい。
- (20) 陳昭容(14)前掲論文。王輝(16)前掲論文。
- (21) 陳平(15)前掲論文。
- (22) 字形の違いは、單純に時間的變化としてのみ理由付けられる問題ではなく、製作工房や文字の起稿者の性質をも含めたさらに広範な視野に立った複眼的な考察が必要である。秦公盃變器についても、二器同銘ながら、1a「秦」の上体「午」の横畫の勾配、1b「公」字の下體「口」の形、2c「盃」などにも字形上の差異を看取することができる。こうした觀點からの銘文の検討は、後日稿を改めて、他器銘文とともに総合的に起こう。
- (23) 李朝遠『新出秦公器銘文與編文』、『考古與文物』一九九七年第五期。
- (24) 徐中舒『秦系文字』、『中央研究院歷史語言研究所集刊』第二本第一分、一九三〇年。『農業考古』一九八三年第三期に再録。又『徐中舒歷史論文選輯』中華書局、一九九八年に再録。
- (25) 饒宗頤は「秦宗」について、さらに具体的に「宗廟に薦める意」と解釋しているが、ここでは動詞として用いられているという點までにとどめたい。饒宗頤『殷代貞卜人物通考』一九六〇年。
- (26) 『河南秦新鄭李崗新石器時代遺址』、『考古』一九七八年第二期。
- (27) 吳鎮烽『金文人名彙編』中華書局、一九八七年。
- (28) B. Karlgren: Some Bronzes in the Museum of Far Eastern Antiquities, BMFEA No. 21, 1949. 『集成』でも該器を殷と斷代している。
- (29) 薛尚功『歷代金鑑冊器款識法帖』以降、該器の器名は伊彝、伊器とされてきたが、吳國生『吉金文錄』だけは辛夷彝とする。銘文の内容から判斷し、ここでは吳氏に従い辛夷彝とするべきであろう。
- (30) 吳國生『吉金文錄』卷二、二十葉。
- (31) 陳夢家『西周銅器斷代』(一)、『考古學報』第九冊、一九五五年。
- (32) 譚戒甫『西周彝鼎銘研究』、『考古』一九六三年第十二期。
- (33) 馬承源『商周青銅器銘文選』第三冊、一九八八年、文物出版社。
- (34) (12)、(14)、(16)前掲論文。
- (35) 詳細は、松丸道雄東京大學名譽教授の論文(未定稿)による。
- (36) (35)前掲論文。『集成』編者もこの銘を偽銘と判斷したためか、『集成』にも收録されていない。
- (37) 郭沫若『弭叔盤及匚盤考釋』、『文物』一九六〇年第二期(『文史論集』人民出版社、一九六一年に重載)。段紹嘉『陝西藍田縣出土弭叔等彝器簡介』、『文物』一九六〇年第二期。
- (38) (37)前掲論文。
- (39) (27)前掲書。
- (40) 一般には秦王鐘の名で著録されるが、ここでは銘文内容に鑑みて敕秦戎鐘とした。
- (41) 荊州地區博物館『湖北枝江出土一件銅鐘』、『文物』一九七四年第六期。
- (42) 李璣『關於竟鐘年代的鑑定』、『江漢考古』一九八〇年第二期。饒宗頤『說竟鐘、鐘夜君與鐘皇』、『文物』一九八一年第五期。李零『楚國銅器銘文編年匯釋』、『古文字研究』第十三輯、一九八六年。黃錫全・劉森森『敕秦戎鐘銘文新解』、『江漢考古』一九九二年第一期。
- (43) 劉彬微『湖北出土兩周金文圖別年代考述』、『古文字研究』第十三輯、一九八六年。

- (44) 曹錦炎「東陸鼎蓋考釋」兼釋「厠」字、『古文字研究』第十四輯、一九八六年。  
 李零(42)前掲論文。  
 (45) 葉其峰『古璽印與古璽印鑑定』文物出版社、一九九七年。  
 (46) 裘錫圭、李家浩釋文及び考釋『曾侯乙墓』(上) 文物出版社、一九八九年。  
 (47) 黃盛璋「試論三晉兵器的國別和年代以及其相關問題」、『考古學報』一九七四年第一期。  
 (48) 周何『青銅器銘文檢索』(文史哲出版社、一九九五年)では、『集成』一一九三一所収の八年五大夫晉機の銘文にある「金」も「秦」と釋しているが、底部の「畫」を看過した誤釋と思われる。よって、ここでの考察の対象からはずした。

# 引用甲骨・金文關係者録略號表

## (甲骨文)

- 後 羅振玉『殷虛書契後編』一九一六年。  
 戩 王國維『戩壽堂所藏殷虛文字』一九一七年。  
 甲 董作賓『小屯・殷虛文字甲編』一九四八年。  
 寧 胡厚宣『戰後寧夏新獲甲骨集』一九五一年。  
 合 中國社會科學院歷史研究所編『甲骨文合集』一九七八、八二年。  
 屯南 中國社會科學院考古研究所編『小屯南地甲骨』一九八〇、八三年。  
 善 劉體智舊藏甲骨原拓冊(未刊、中國社會科學院考古研究所藏)。  
 (金文)  
 小校 劉體智『小校經閣金文拓本』一九三五年。  
 集成 中國社會科學院考古研究所編『殷周金文集成』一九八四年、九四年。